

随想 「甘え」が日本を滅ぼす

どうすれば強い日本を作れるのか

弁護士 金子博人

第25回 水戸黄門は死んだ

1. 水戸黄門が来るものと信じている

2011年12月、42年の歴史に幕を下ろしたTBSのドラマ「水戸黄門」は、驚異的な長寿番組であっただけでなく、記録的な視聴率を誇った超人気番組であった。

なぜ、これだけ国民に愛されたかといえば、庶民が悪代官や悪徳商人に虐げられている時、頼みもしないのに水戸黄門が突如やってきて、葵の印籠の権威ですべて解決してくれるところであろう。庶民は、自らは何の努力もしなくても、絶対的な権威で一気に解決してくれるという結末に満足し、人気を博したのである。

もうひとつ、黄門の特徴を加えれば、苦難を解決してくれるも何の対価も求めないことである。本来人は、苦難に遭遇すればその解決に自ら努力しなければならぬ。専門家に頼めばタダではない。訴訟をすれば費用も時間もかかる。しかし、水戸黄門は後から請求書を送りつけることもない。費用もゼロだ。すべてが「あてがいぶち」である。

大陸諸国では、社会悪に巻き込まれれば、自らの努力で解決を図る必要がある。厳しい社会が前提で、努力もしないで、いい結果だけが天から降ってくるとは思わない。庶民は、デモを

して自分の主張をアピールするし、裁判所に持ち込んで解決しようとする。面倒だが、そうしなければ社会問題は改善されないのだ。

日本人は、そのような努力には極めて消極的であるが、あきらめているわけではない。自分「弱者」だと宣言して、誰かが何とかしてくれるはずだと期待している。まるで、幼児が「おかあちゃん、何とかして」といつているようなものだ。

水戸黄門は、まさに、このように「何とかして」といつている日本人の「母親」の役割を果たしているのである。無限の愛を注いでくれる母親は、水戸黄門と同じで、無償ですべてを解決してくれる。

黄門さまが、「葵の御紋」の権威で一気に解決してくれる其の場面に喝采するのは、いじめられていた幼児のところ、母親がやってきていじめっ子を一気に追い払ってくれる、その時の爽快感と安堵感そのものを感じるからであろう。

幼児の時に母親に頼るのはこの文化圏でも同じである。しかし、諸外国は、大人になるにつれ、母親が何時までも助けてくれるものではないことを知り、親離れをして一人で生きていく。教育は、親離れして独り立ちできる逞しさを与えるのが目的な

のである。

ところが、日本人は、親離れ、子離れができないことを「親孝行」と賛美して、社会に出ても「母親の代役」を求める。水戸黄門は、まさにその親代わりなのである。

ただ、「水戸黄門」を求めているうちはまだよいが、日本人は、「カミカゼ」という母親を期待して国を滅ぼしたことは忘れるべきではない。日本は、勝つためのシミュレーションを誰も描かないまま、太平洋戦争に突入していった。やればいつかは「カミカゼ」が吹いて、何とかなるはずだという「甘え」の極地の心理が働いていたと思えない。この時の、「カミカゼ」は、「母親」そのものである。実際、「カミカゼ」と名付けた特攻作戦が繰り返されたが戦況は変わることは無かった。

2. 水戸黄門を待ち焦がれさせる日本の教育

日本以外の大陸諸国では、12歳ぐらいになると一人で生きるための準備を始める。17歳ころには、将来何になるか、社会に出たら何をするかを決める時期だ。18歳で選挙権を与え、社会に対して責任を持たされる。大学生はもはや大人だ。可能な限り親から独立し、自分の将来を見据え、それに必要な勉強をし、

自らを鍛える。企業に新卒採用主義もなければ、新人教育もない。企業が必要とする実力をつけて始めて採用してもらいえる。就職してもキャリアアップを考え、自分にあっている道を探すため転職もいとわない。

ところが、日本の子育ては、大陸諸国とは全く異なる。親も学校も、「自分は社会に出て何ができるか」などと考えるのではなく、「いかにいい大学に入るか」を考えさせようとする。生徒は、「いい大学に入れば、いい会社に入れる。バラ色の人生が待っている。余分なことを考えず、受験勉強をしない」と教えられ、それを信じて、あてがいぶちの受験勉強に没頭する。

大学に入って少し遊ばせてくれるが、すぐ就活である。就職も自分が何をやるかでなく、何をやるかは、採用してくれた会社が決める。企業は、新卒採用主義で門戸を大きく開き、就職率が低ければ、マスコミが大騒ぎをして応援してくれる。採用後は、新人教育で、給料を出しながら教育までしてくれる。まさに至れり尽くせりである。

大陸諸国には、新卒採用主義は無いし新人教育もない。新人教育が必要なのは、能力が無いものとして門前払いである。

このような教育の違いで、日本の大学生は、まだ子供だ。大

陸諸国の17歳より未熟である。親は、入学式はもちろん、卒業式にも参加し、親のための就職説明会も必須である。先進国では18歳で選挙権を与えるのが普通であるが、日本ではどうも無理で、20歳でやっと与える。が、それでも若者は持てあまし、20代前半の投票率は極めて低い。このように大人にならせない教育が、親離れができずに甘えて、水戸黄門が助けてくれるのを待ち焦がれる日本人を作ることになるのである。

3. 水戸黄門にならせない教育

日本の学校では、「いじめ」が深刻な問題となつて久しい。ただ、いじめは大陸諸国でも起る。しかし、日本のいじめは特殊であり、クラス全員でいじめるといふ特性がある。積極的にいじめるのは一部でも、他の者はそれに合わせて無視したり、見てみないふりをする。いじめられていた子を手助けしたり、いじめを止めさせようとする正義の志はいない。いじめられる子は、孤立無援となり、まさに「ムラ八分」という状況に追いこまれる。

大陸諸国では、先生はいじめに對して「いじめを見つけたら、助ける。いじめの奴を止めさせろ」と教え、生徒達が自ら正義

を回復できることを期待する。

しかし、日本の先生はそのようなことを教えない。それどころか、いじめが社会問題化した初期は、「いじめられる者にも、いじめられる原因がある」と公言する先生も結構いた。さすがに、今は正面切つて言う者はなくなつたが、本心はそう思っている先生は多いはずだ。

いじめられる子には、そのきつかけとなる、他の子と違うところがあることが多い。そのため、「和」を第一とする日本社会では、「和」を乱すものとしてそれを排除しようとし、「いじめ」となる。先生も、クラスの「和」を乱すものとして、「いじめられる者にも、いじめられる原因がある」と思いたくなるのだ。

それゆえ、生徒に「いじめを見つけたら、助ける。いじめの奴を止めさせろ」などとは決して言わない。そんなことを言えば、それは、「和」を乱すことを奨励することとなるからだ。

「いじめ」で生徒が自殺するという事件が頻発するが、その時日本のマスコミは、先生や学校に對して、なぜ「いじめが見つけられなかったか」と責めるが「なぜ、クラスの中で、いじめを止めさせようとする生徒がいないのか」という問題提起は決してしない。

大陸諸国では、教育の場で、

自ら水戸黄門になることを教えるが、日本は逆で、自ら水戸黄門になることは「和」を乱すものとして嫌い、そのかわり、水戸黄門が向こうからやってきて助けてくれることを期待する人間を量産するのである。マスコミも、それが当然のこととして報道しているのが今の日本である。

4. 水戸黄門は死んだ

水戸黄門に期待するのは、このように、自ら正義の志になることを放棄することを意味する。水戸黄門がテレビから退場するこの機会に、日本人は水戸黄門を待ち焦がれる意識から卒業すべきであろう。「水戸黄門はもう来ない。死んだ」のである。



金子博人
(かねこ ひろひと)
金子博人法律事務所。弁護士。早稲田大学法学部卒業。同大学院修士課程(商法)修了。1977年4月弁護士開業。国際旅行法学会(IFITA)会員。大東文化大学法科大学院。日本大学法科大学院講師。市場取引監視委員会委員(東京工業品取引所)。日本ブライムリアルティ投資法人執行役員。